

森林に生まれ生かされ活用する発酵のふるさと!! 地域財産の活用と情報発信で図る持続可能な未来

豊かな自然環境が育んだ暮らし
今も息づく旧4町の個性

千種町の4町の合併により、新市としての歩みを開始。令和7(2025)年4月1日には市制施行20周年の節目を迎えている。

市域北部が鳥取県に、西部が岡山県に接する兵庫県内陸部(中西部)のまち、市域全体が「しそう森林王国」とも呼ばれる宍粟市は、平成17(2005)年4月1日、旧宍粟郡山崎町・一宮町・波賀町・

日本最古の風土記「播磨国風土記」にある「宍粟(しざわ)の郡」に由来する。さらに「宍粟」の「宍」は肉を、「粟」は穀物を意味しており、宍粟市エリアが古来、狩猟や農耕などの盛んな土地柄であったことが分かる。



令和7年6月29日に挙行された「市制施行20周年記念式典」の様



宍粟市を代表する溪谷美、ケヤキやカエデの多い新緑の赤西溪谷(波賀町) ©観光協会



市内最大の紅葉の名所、最上山公園の「もみじ山」。幾重にも重なる鮮やかな紅葉が訪れる人々を魅了する(山崎町) ©観光協会

同地に古来豊かな実りをもたらしてきたのは、1000m級の山々とその谷あい流れ、播磨国の母なる清流と並び称される揖保川水系および千種川水系をはじめとする大小の河川と、その伏流水が市内各所で湧出する

清らかで豊かな水資源であり、この環境が育んだのが、現在も地域の約9割を占める森林資源である。宍粟市を構成する旧4町は、そうした天然資源を共通の地域財産としつつ、さまざまな形で連携し、役割分担しながら発展してきた歴史的経緯がある。宍粟市における土産物やふるさと納税の返礼品としても好評な各種の名産品、例えばブランド牛の宍粟牛、ブランド米の「ちくさの舞」および「みかたの舞」、清流に生まれ



ふくもと しんすけ
福元晶三
宍粟市長



創建1500年以上と伝わる播磨国一宮・伊和神社。播磨三大社の一つとして尊崇を集めている



石垣に支えられた棚田が展開する「山田の棚田」。まさに日本の原風景の一つといえる

歴史的遺構が今も息づいている。平安時代に京都石清水八幡宮の莊園だった来歴を持つ波賀町は、室町時代から戦国時代にかけて築かれた波賀城跡など中世を中心とする歴史文化財の宝庫だ。千種町は日本刀の原料として名声を得た「千草鉄」や、原料鉄の加工場である鉄山の遺跡を各所に持つ「たたらふるさと」として、その名を歴史に刻んできた。

宍粟市に鉄道駅はない。だが、江戸時代初期から姫路城下と山崎城下を結ぶ前述の因

たアユやアマゴ、滋味豊かな大地の恵み・自然薯、名水から造られる地酒、名高い手延べそうめんなどは、深く豊かな古来の自然環境（地域資源）を背景に、そこで暮らす人々が長い歳月をかけて育んできた努力の結晶なのだ。

合併後もかつての町名を地名とする4町には、二つの幹線街道が循環道のように巡っている。一つは姫路市を基点に鳥取市へと向かう因幡街道（国道29号）が山崎町に達し、さらに揖保川（途中からは支流の引原川）沿いに北上する道筋（※因幡街道は途中から若桜街道）をたどるルート。もう一つは、岡山市を基点に千種川沿いに鳥取市方面に向かう県道53号

（大阪・神戸方面から下関市に至る中国自動車道と一部並走）から県道72号・国道429号を経由し、北上するルートだ。二つのルートに抱かれるような形で、山崎町・一宮町・波賀町・千種町は南から北に標高を少しずつ上げ、森林を深くしながら、順番につながっている。

4町は豊かな自然環境を背景に発展してきたという意味では同様だが、それぞれに個性のかつ独自の歴史も有している。

例えば山崎町は、江戸時代に形成された旧城下町で、現在も宍粟市の中心市街地を形成している。一宮町の町名は播磨国一宮・伊和神社を由来としており、縄文遺跡など悠久の



幡街道を通じ、新幹線停車駅である姫路駅から車で45分、バス便でも60分で直結している。播磨新宮駅（たつの市/JR姫新線）とは、車・バス共に約20分で結ばれ、神戸市の中心・神戸三ノ宮駅とも、国道2号および中国自動車道（山崎IC）を経由し、約80分つながっている。

揖保川の土手沿いに建つ宍粟市役所本庁舎（山崎町）の壁には「森と共に生きるまち宍粟市」というキャッチフレーズが印字されている。加えて、宍粟市がシティブロモーションの際に使用するもう一つのキャッチフレーズが「日本酒発祥の地」あるいは「発酵のふるさと」だ。これらのキャッチフレーズも「播磨国風土記」に由来する。「播磨国風土記」には、同地が「麴（かび）」の生えた米で「庭酒」を造り、神様に献上したと書かれており、これが酒造りに関する日本最古の文献となっているからだ。



宍粟市本庁舎には、四季折々の顔を見せる都市公園と、清流揖保川を臨む親水公園が隣接。多彩なイベントが開催され、交流が生まれる



日本酒発祥の地・庭田神社内のぬくい川。神代の物語を今に伝える、酒造りの原点の清流

そんな古代ロマンに満ちた酒造りの歴史は、山崎町に今も立地する二つの酒蔵に継承されている。また、酒蔵を軸とする昔懐かしいまち並みの宝庫「酒蔵通り」は、酒造りと共に育まれ、宍粟市を代表する食文化の源泉となった「発酵文化」の発信地の役割をも果たしている。

このように豊かな地域資源に恵まれ、多彩で深い地域文化を有する宍粟市の目下最大の地域課題は、大都市圏を除いた全国の都市に共通するあらがいがたいトレンド「人口減少」の抑制だ。

宍粟市が発足した平成17年4月末の人口4万5724人は、本年3月末現在で3万2721人に減少。その間、国立社会保障・人口問題研究所が平成25(2013)年に発表した「2060年の将来人口推計」では、1.9万人と予測された。また「過疎地域自立促進特別措置法」の規定で、合併時から波賀町と千種町が過疎地域とみなされてきたが、平成29(2017)年度以降は、宍粟市全域が

過疎地域に指定された。令和3(2021)年度初頭に新たに施行された「新過疎法」においても、引き続き市域全体が過疎地域に指定されている。

宍粟市ではこうした人口面の現況に鑑み、令和3年度に策定した「第2次宍粟市総合計画後期基本計画／第2次宍粟市地域創生総合戦略」における、持続可能なまちづくりのテーマとして、地域の原点を強く意識した「森林(もり)から創(はじ)まる地域創生」を掲げた。並行して「宍粟市過疎地域持続的発展計画」を策定、人口減少対策としての地域活性化推進を最重要課題とし、2060年の目標人口として独自設定した「2.1万人」の達成を目指すべく、多彩な地域活性化施策・事業を精力的に展開している。

地元産材のぬくもりがもたらす次世代の地域愛醸成

「『森林から創まる地域創生』とは、森林のまち・宍粟市の特徴をフルに生かすため、例えば《木育の視点》を取り入れたまちづくりを目指す、林業振興や森林ツーリズムの可能性を追求する、森林資源を端的に活用する」という意味合いももちろんあります。しかし、それだけではありません。

「森林(もり)と共に生きる」ということの意味は、森林を育んだ環境(地域資源・財



地元の生産者が軽トラックで出店する「はが軽トラ市」。地域の旬と魅力が集まる市場として地域住民や観光客でにぎわう

産)の全てを基盤とし、持てる力の全てを総合しながら、産官民のオール体制で持続可能な未来を探っていくという決意表明なのです」

旧山崎町に生まれ育ち、昭和47(1972)年から旧山崎町役場に入職。合併後は宍粟市企画部次長、教育委員会教育部長、一宮市民局長を歴任するなど、約40年間の市役所勤務を経て、平成25年に就任した福元晶三宍粟市長(4期13年目)は、静かな中にも、秘められた熱い思いを感じさせる口調で、そう語る。

さらに宍粟市における「森林と共に生き



大正・昭和にかけて木材輸送を半世紀以上担った波賀森林鉄道。現在は観光用列車として復活し、歴史の記憶を乗せて定期運転中(推薦産業遺産)

る」のローガンには、「森林に囲まれた環境の中で、古来、互いに手を携え、発展してきた4町をバランスよく活性化していきたいという意味合いも含まれます」と、福元市長は続ける。

「この4町をバランスよく振興していくというテーマに関しては、例えば合併当初から、本庁舎を置く山崎町以外の3町の旧町役場跡に、市民局をそれぞれ配置。地域振興を担うまちづくり推進課などの主要部署を集めるなど、住民の交流拠点としての役割を担ってきました。」

さらに、図書館など旧町時代の主要公共

施設も集約した『市民協働センター』（一宮町／一宮市民協働センター、波賀町／波賀市民協働センター、千種町／千種市民協働センター）を、市制施行20周年を迎える直前の令和3年から令和6（2024）年までの間に相次いで開館しました。近未来に向けた各町の地域振興の基盤（拠点）の構築は、これによってほぼ整ったと考えております（福元市長）

「木育」は周知の通り、宍粟市が発足する直前の平成16（2004）年から17年にかけて、北海道から始まった「木とふれあい、木に学び、木と生きる」ことを骨子とする次世代教育の取り組みが嚆矢とされる。地域の約9割を森林が占めている宍粟市には、まさにふさわしい取り組みだ。

子どもの頃から郷土の木や森（自然環境）を身近に感じ、活用することで、故郷の自然環境との関わりを常に意識する社会環境を構築し、地域愛を醸成していく「木育」。それは平成17年成立の「食育基本法」が「生きる上での基本であり、知育・徳育・体育の基礎となるべきもの」と定義した「食育」の理念とも通底する。つまり、木育は「知育・徳育・体育・食育」と共に重要な、「手触り感」に満ちた次世代育成の



各市民協働センターには図書室が配置され、地域住民の憩いの場になっている（一宮市民協働センター）



各市民協働センターの近くには遊具が充実した公園が整備され、安全な遊び場として、3世代でゆっくり過ごすことができます

取り組みともいえる。

「木育に関する本格的な取り組みはまだこれからですが、宍粟市では令和4（2022）年9月に、『宍粟市木育推進方針（SDGs推進に向けた森林を活用したまちの創造）』を策定し、基本的な取り組み方針を示しました。そして木育を通じて、子どもたちを軸に市民の地域愛を醸成すると同時に、SDGsへの取り組みや脱炭素社会構築にも寄与する、森林のまち・宍粟市らしいアプローチを実施する旨の宣言を、市の内外に向け発信しました。」

その手始めの事業として、例えば、一宮町・波賀町・千種町の旧町役場跡に整備した市民協働センターでは、建物自体から市民が日常的に利用する椅子やベンチなどに至るまで、地元産材をふんだんに活用しています。

さらに、令和2（2020）年に供用開始した一宮市民協働センター内には、木育のスタートアップを体現する乳幼児向けの施設として『もくもく広場』を設置しました」（福元市長）

一宮市民協働センター内の「もくもく広場」は地元産材を中心とする木製玩具がたくさん備えられた遊戯室だ。小学2年生以下の子どもたちが保護者同伴で自由に遊べるほか、子育て支援に関する各種イベントが行われている。

「もくもく広場」より規模は小さめだが、



地元産材で作られた玩具の持つぬくもりが、子どもたちの心を捉えて離さない(もくもく広場)

波賀市民協働センター内の「木っずルーム」にも同様に、木製玩具がたくさん用意され、親子連れの利用者が連日にぎわっている。

住み続けたい・住んでみたいまち 発酵食品のふるさと発信

「これも木育につながる環境教育の一環ですが、教育委員会の事業として、令和6年度から市立小中学校の生徒たちが使用する学習机を、順次、地元産材の杉板に換える取り組みを開始しています」

福元市長はそう言いながら、応接室に飾られていた机の天板を指し示した。それは宍粟市産の杉板を机の天板用に加工したものの。明るいクリーム色に淡いオレンジの木目が入った天板で、児童は小学1年生から



地元産材の杉板を加工した学習机の天板。目に優しい木目とぬくもりのある手触りが子どもたちに大好評だ

6年間、同じ机を使い続けるという。

「地元産材を使った机の費用は、従来品より割高ですが、子どもたちが地元産材のぬくもりを日常的に感じながら学び、地域への愛着をより深めてくれるのであれば、これに勝る喜びはありません。」

同時に、地元産材の魅力子どもたちが口コミで広げてくれる効果や、大都市圏に進学、就職の場を求めた子どもたちが、いつか小学校の机のぬくもりを思い出し、故郷に帰ってくる呼び水になることも期待しております（福元市長）

地域の約9割を森林が占める宍粟市にとって、令和元（2019）年度から始まった森林環境譲与税制度により配分される財源の効果は非常に大きい。林業振興にまつわる森林経営管理推進事業のほか、林業の担い手育成事業、環境景観保全事業などに幅広く活用されている。

特に注目されるのは、次世代育成に直結する環境教育推進事業（宍粟産材を使った生ごみ処理機・キエーロの普及事業など）や、前出の「もくもく広場」、小学校の学習机に地元産材を活用する利用促進事業のほか、木質バイオマスの推進による再エネの利用促進など、森林資源をフルに活用した各種の事業だ。そして前出「日本酒発祥の地」「発酵のふるさと」の発信事業は、「森林のまち・宍粟市」の発信事業と並んで、宍粟市の魅力を発信するシティプロモーション事業を代表する

宍粟市

市 政 ル ポ

(兵庫県)



「学校給食甲子園」で優勝した際の献立。豊かな地場産物を組み合わせ、発酵のふるとらしく醤油麹や甘酒などの発酵食品で味付けされている

有力なコンテンツだ。

神秘的なまでに奥深い森林環境、その森林資源の活用が育んだ副産物ともいえるべき発酵文化の発信は、交流人口・関係人口の拡大、ひいては移住・定住の促進にも結び付く有力な観光コンテンツで、既にコンスタントかつ多面的な実績を構築しつつある。

「私が市長に就任した翌年の平成26(2014)年、宍粟市は『日本酒発祥の地宍粟市日本酒文化の普及の促進に関する条例』(日本酒で乾杯条例)を制定しました。

宍粟市における『日本酒で乾杯条例』は単なる話題づくりでなく、森林と共に生きる宍粟市の歴史と伝統・文化の総合的な継承、地域の振興と発展をオール体制で目指すた

めの願いを込めた基本的な姿勢を、一つの具体的な取り組みに落とし込んだものといえます。実際、これをきっかけに、宍粟市では産官民の協働による、地域振興の多様な取り組みが次々に生まれ、実施されてきました(福元市長)

具体例を挙げれば、地元の酒造会社との連携で実現した、江戸時代に生まれ昭和52(1977)年に製造中止となった「まぼろしの酒・三笑」の復活事業(平成30/2018年)がある。また、宍粟市商工会青年部が「子どもたちに世界一の誇りを体験させたい」との趣旨で行い、達成した「世界最多人数(1300人)による腕組み乾杯ギネス記録」の取り組み(令和元年)。「第17回全国学校給食甲子園」で優勝した山崎学校給食センターの「アレルギー対策にも有効な発酵食メニュー」(令和4年)など、枚挙にいとまもない。

中でも注目したいのは「学校給食日本一」の取り組みだ。宍粟市の学校給食はそれ以前にも、福元市長の就任初年度(平成25年)に、「都市農山漁村交流活性化機構」が主催する「地産地消推進全国フォーラム」で「食材の地産地消度7割超え」が評価され、農林水産大臣賞(地域振興部門)を受賞している。評価の高さは伝統的ともいえるが、加えて、児童の健康維持や、アレルギー対策にも効果のある発酵食が採用されたことで、日本一の栄冠をつかむに至った。

また、宍粟市では現在、令和10(2028)



「しろう酒蔵通り(景観形成重点区域)」には二つの酒蔵や重厚な商屋建築が連なり、発酵商品や発酵ランチが堪能できる

年3月の開院を目指し、北部地域の基幹病院にふさわしい設備と診療体制を備えた、市民待望の『市立病院・新病院(仮称)』の整備計画が着々と進んでいる。新病院の建設は、市民に安心で安全な医療を提供していくための基盤として不可欠な事業であり、今後の推移が注目される。

同時にこれまで述べてきたような、地域愛を醸成し、地域の魅力を全国発信することで、持続可能な近未来につなげる多彩な各種取り組みの効果なども相まって、「住み続けたい、住んでみたいまち」としての宍粟市のイメージアップ(福元市長)がこれからのような形で成就していくのか。興味は尽きない。(取材・文：遠藤隆／取材日：令和8年2月20日)